

「ヤマメのため」は「人のため」



ごみを拾う未来創生塾の塾生たち



集めたごみを3種類に分別し、量を確認した



両毛漁協の中島さんの説明を聞く塾生たち

桐生市の産官学民で取り組むオリジナル教育プログラム「未来創生塾」(野田玲治塾長)の塾生76人が29日、渡良瀬川の相川橋周辺でごみを拾い、ヤマメの稚魚放流に挑んだ。昨今よく耳にするSDGsとは、持続可能な開発の

ために国連が定めた国際的な目標。ヤマメのために行動することは、そのまま人間にとっても暮らしやすい社会をつくることにつながる。未来創生塾の取り組みも、SDGsの理念にしっかりと結びついている。

未来創生塾の76人、風土を学ぶ

渡良瀬川でごみ拾い&稚魚放流

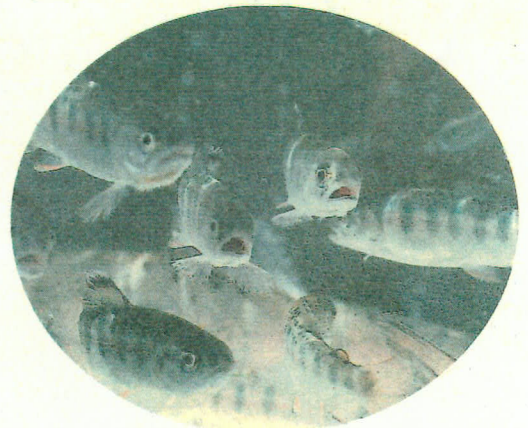
河川清掃とヤマメの稚魚放流は、未来創生塾が山田製作所(岸本一也社長)や両毛漁業協同組合(中島淳志組合長)の協力を受けて実施している。恒例の学習プログラム。塾長で群馬大学大学院理工学府准教授の野田さん「単にごみを拾うのではなく、ヤマメが生息する清流にどんな種類のごみが落ちてきているのか。どうすればそれがなくなるのか。各人が考え、みんなで情報共有してほしい」と、取り組みの狙いを語る。



流れの上流に向けて稚魚の入ったバケツを浸す塾生たち。「元気で育って」と声をかけた(相川橋上流で)

相川橋上流左岸では、両毛漁協組合長の中島さんがヤマメの特徴や生態、渡良瀬川の自然環境について説明。サケやマスとの仲間には「パーマークがついていることや、流域に生息するカワウは1日150匹もの魚を食べることなど、子どもたちに分かりやすく伝えた。ヤマメが生息する渡良瀬川のこの日の水温は18度。「体温が36度もあるみなさんが触れると、ヤマメはやけどをしてしまうので、川の水で手を冷やしてから魚に触れ、よく観察してみてください」とも。子どもたちは稚魚を入れたバケツを上流に向けて浸すと、流れに向かって泳ぎだす姿に「元気で育って」と声をかけながら、静かに見守った。

この日は山田製作所の社員4人も参加。弁当なども提供し、活動をバックアップした。



パーマークのついたヤマメの稚魚

SDGsでは、いま取り組むべき17の目標、169の達成基準、232の指標を掲げている。ヤマメの稚魚放流もごみ拾いも、企業や組合との協働が不可欠な活動である。